ポメラニアンに発症した皮下脂肪織炎の1例

大室農夫^{1)*} 井上 薫²⁾ 代田欣二²⁾

¹⁾大室獣医科クリニック

²⁾麻布大学生物科学総合研究所

6歳齢の雌のポメラニアンのかんかによる外傷が1週間たって拡大してきた事を主訴に、平成12年10月21日に当院受診。腰部・臀部・右大腿部に潰瘍を、腹部中央付近に紫斑を認めた。外傷の処置として潰瘍部の殺菌消毒とCEX (30 mg/kg bid) の内服を開始するも、第3病日に頸部・腹部に新しく皮下結節を触知(図1, 2)。針生検にて好中球中心の炎症細胞と脂肪滴を認めたが、細菌は認められなかった。このような臨床像から皮下脂肪織炎を疑い、毛検査、皮膚生検、血液検査、細菌・糸状菌の培養等の検査を実施するとともに、ビタミンEの投与 (100 mg/head/day) を開始した。血液検査では軽度の貧血と血小板の減少、BUN, ALPの軽度の上昇、Albの低下などがみられた。培養検査では細菌、糸状菌ともに陰性。皮下結節部の病理組織検査で皮下脂肪織内に好中球の浸潤と出血を伴った融解・壊死が認められ、急性脂肪織炎ないし壊死性脂肪織炎と診断した(図3)。第5病日からプレドニゾロン (1 mg/kg sid) の内服を開始したが病変が拡大増加傾向を示したため、オーナーの希望もあり第11病日で投与を中止した。その後CEXとビタミンEの投与を続行したところ第14病日頃より皮下結節が軟化し、縮小し始め約1ヶ月で略治した(図4)。

皮下脂肪織炎の原因としては感染症、免疫介在性疾

図1 第3病日の皮膚所見。頸部に認められる多数の結節状病変。一部は表面が自潰し赤褐色内容を排泄。

図2 第3病日の皮膚所見。腰部の皮膚欠損部。

* 連絡先: 大室農夫 (大室獣医科クリニック)

〒194-0212 東京都町田市小山町 4262-2

TEL 042-771-7581 FAX 042-771-7875

E-mail: omuro@green.ocn.ne.jp

図3 病変部生検の組織像。皮下脂肪組織の壊死, 好中球を主体とした細胞浸潤, 出血が認めらる。

患, 外傷・注射等の物理化学的刺激, 異物, 腫瘍, 脾臓疾患, 栄養性(猫のビタミンE欠乏), 特発性などが知られているが, 自験例では明らかな寄生体や内臓疾患は認められず, 外傷性皮下脂肪織炎が強く疑われた。治療初期には抗酸菌感染が否定できないためプレドニゾロンを1 mg/kg sidで投与を開始, ビタミンEも投薬が難しいとのオーナーの希望で100 mg/headの投与を行った。結果的にプレドニゾロン投与中止からしばらくして急激に病変が改善に向かい治癒, 再発も見られていない。プレドニゾロンの効果を否定するのは多くの成書に記載されている投与量より少ないため困難と思われる。また, ビタミンEの投与量に関しても一般に皮下脂肪織炎において使用される量より少なく, 無処置で自然治癒した例の報告もあるため明らかに有効であったとは明言できないが, その抗酸化作用, 過酸化物質からの生体膜の保護, 末梢循環の改善など, 非特異的な皮膚環境の改善作用がこの治癒過程で何らかの役割を演じていた可能性は否定できないと思う。この疾患の炎症反応における病態生理, 2つの薬剤の投与時期や投与量, オーナーへのインフォーム

図4 治療開始1ヵ月後の皮膚所見。

ドコンセントなど考えさせられることの多い1例であった。

引用文献

- 1) Scott, D.W., Miller, W.H. and Griffin, C.E. 2001. pp 1156-1162. *In: Small Animal Dermatology*, 6th ed. W.B. Saunders, Philadelphia,
- 2) Scott, D.W. and Anderson, W.I. 1988. *J. Am. Anim. Hosp. Assoc.* 24: 551-559.
- 3) Richard, G. Harvey, Patrick, J. McKeever 1998 .カラーハンドブック犬と猫の皮膚病(岩崎利郎監訳), メディカルサイエンス社.
- 4) 永田雅彦. 2000 . 犬と猫の皮膚科臨床. ファームプレス.